



神奈川新聞 11月11日号の特報で 掲載されました

神奈川新聞

THE KANAGAWA

2016年〔平成28年〕

11月11日〔金〕

先負

〒231-8445 横浜市中区本町2-23
総合受付 045-227-1111 1カ月3189円・1部120円



きょうの天気

北の風やや強く、雨降すから曇り
最小湿度60%、海上最大風速13メートル

天気	8時	12時	18時	24時	最高気温	最低気温
横浜	晴	晴	晴	晴	12.6	6.80
横浜東	晴	晴	晴	晴	12.6	6.80
鎌倉	晴	晴	晴	晴	12.7	6.80
相模原	晴	晴	晴	晴	11.6	6.80
藤田	晴	晴	晴	晴	12.6	6.80
小田原	晴	晴	晴	晴	14.8	6.80
東京	晴	晴	晴	晴	11.6	6.80

週間予報	きょう	あす	13日	14日	15日	16日	17日
横浜	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴
最高気温	12.6	18.1	18.1	19.1	19.1	15.0	15.8
最低気温	6.0	15.0	15.0	6.0	6.0	20.0	6.0
東京	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴
最高気温	11.6	18.0	19.0	20.1	19.1	15.0	15.7
最低気温	6.0	15.0	15.0	6.0	6.0	20.0	6.0

各地の天気はテレビをご覧ください。

1 A版 明治34年2月18日第3種郵便物認可〔日刊〕

きょうの紙面

少年高齢化対策へ地域の力結集 16
横浜市金沢区に多世代が集える住民の交流拠点が開業。築約80年の民家を改修し、住民が内装を手掛けた。ランチの時間は多くの人でにぎわった。

熱い！スリッパ卓球 16
女児撮影容疑で再逮捕 23
チートツールで業務妨害 23
復刻版ファミコン予約殺到 14
廃炉費を新電力にも負担 14

総合 2・3 経済・商況 13~15
文化・約り 5 地域・広域 16~19
読者 6 TV解説・ラジオ 20
スポーツ 8~10 社会 22~23

先祖の農民作家の謎に挑む

江戸の庶民が親しんだ本「草双紙」。相模原の農民が3作も執筆、出版している。子孫たちが農民作家の謎に挑んだ。

論説 ■ 特報

相模原・荒井さん兄弟 出版の謎も解く

江戸の庶民が手にした本「草双紙」。浮世絵師による挿絵と独特の崩し字が一体となった、娯楽読み物だ。庶民文化の華ともいえる草双紙を、磯部村(現・相模原市南区)の農民荒井金次郎が3作も執筆、出版している。表紙を描いたのは、富嶽三十六景で知られる浮世絵師・葛飾北斎。ただの農民がどうやって文化の中心地に足跡を残したのか。その謎に挑んだのが、金次郎の子孫で、同区で絵合印刷会社「日相印刷」を営む荒井徹さん(78)と功さん(79)の兄弟だ。(青木 幸恵)

豪華メンバーで 荒井金次郎のペンネームは仙臺亭・拍琳

「花吹雪緑柳」「星下梅花吹」「柴房紅の文箱」の3作品を1800年代に相次いで出版した。校閲は近時の売れっ子作家・柳亭種彦が担当し、絵師は歌川国芳、歌川貞秀、ペリニョーラが描かれた。川の名産ユが描かれた。相模原市で神奈川県史でも拍琳は「草双紙の作者」と記されているが、これら豪華メンバーを擁して出版に至る経緯は、ここでは有力な紹介がなかった。なぜか推測のみ。

文字と紙の文化 2年前、経緯を知った社員がネット検索で大量図書館に所蔵されていることを発見した。ちょうど社の創業50周年に当たって、社業を通じて「文字と紙の文化」を伝えてきた社員がある。兄弟は「先祖

先祖が書いた草双紙を翻刻



出来上がった「仙臺亭拍琳 翻刻全集」を持つ荒井徹さん(左)と功さん(右)。

出版の謎も解く

もまた文字に関わって時代を生きたとの思いを強くし、「拍琳の業績」当時の文化の一端を本として世に送り出すことを決意。原本のデータ提供を受けて調査・編集作業が始まった。

まずは、崩し字を専門家に解説してもらって活字に置き換える「翻刻」という作業を行った。だがほとんどが平仮名で書かれたそのままだ意味がつかみにくいため、内容が分かるように漢字かな交じり文に変換して改行と句読点を加えた「まごめ」の2種類のパートを作った。

■特産のアユの絵
作業の中で、柳亭種彦が「花吹雪」序文に「相州高座郡磯部村」の何某から種本が送られてきた」と出版の経緯を記しているのを見つけた。「老親がおり江戸に出れば、この作品は草双紙になるも



3作品はこんな話...

拍琳の作品は「思い合う男女の仲が裂かれ、宝物の紛失事件が絡む」という筋立てが基本。そこに「登場人物〇〇は実は▽だった」という、ともすれば荒唐無稽な「暴露」が連続し、最後は勧善懲悪のめでたしめでたしとなる。

▼「花吹雪」では、駿河の国、村妻家主の父が盗賊に殺され、家宝である天皇直筆の短冊と古今集が奪われた事件を軸に、あだ討ちを志す家臣たちの入り組んだ人間模様を数々の因縁話とともに描かれた。兄の不品行がもとで離縁されたお絹。その夫・長右衛門は隣家の娘に

男女の愛憎、勧善懲悪

言いつられ、やまぢをやいたお絹は夫がお目目買戻した短冊を持ち去り...

▼「星下」は、厚木市上依知の妙伝寺、星下りの毒海、の言い伝えに想を得た作品。

糸屋の跡取り・細五郎は、赤子のとき星下りの梅の木の下で拾われた。その実父は後継を知らぬまま糸屋に奉公してお店裏つ取りを企てる。

細五郎が若狭の花吹雪と逢瀬を重ねるなか、質屋に掛け軸が盗まれる。細五郎は花吹雪に権柄を尋ねて斬殺されるが、けがもなく釈迦堂で発見される。「釈迦堂」では、若狭をめぐる三角関係に、家宝(念珠)の奪い合い、お家再興、出陣した妻の波状の人生など、盛りだくさんの展開だ。

のかとの手紙が付いている私も作者に会いたいが村までは行けない、俗名を出してよいか分からないので村名を作者の替わりにして出版する」といふ内容。

また「為(翁)葛飾北斎」に表紙にアユの絵を描いてももらったのは、磯部あたりの名産ゆえという種彦の口上も残されていた。

「つまり金次郎が作品を送り、それを種彦が気に入ったのが始まりだったと納得した兄弟2人。確かに「花吹雪」は「相模磯部村」2年後の「星下」は「相模磯部村」仙臺亭拍琳 作となっていた。

謎を解いた人々は「先祖供養になった」やり遂げて感無量と語った。

×××
拍琳の作品だけでなく、序文はもうほとんど種彦も全て収録した「仙臺亭拍琳 翻刻全集」は折り判500部、原本の表紙絵の折込みカラー4丁付き、自費出版で500部を作り、市立博物館を通じて市役所に40部を寄贈した。問い合わせは、日相印刷0427-406000。